



雲仙天草国立公園

火山と暮らす、 多島海に生きる

国立公園ものがたり



雲仙天草国立公園

火山と暮らす、
多島海に生きる

国立公園ものがたり



火山と暮らす、 多島海に生きる

国立公園ものがたり

雲仙天草国立公園と ともに歩む

目次

- 04 雲仙天草国立公園
雲仙は国立公園の第一号
雲仙岳と天草の海が織りなす“水陸大展望”
- 雲仙
- 08 〔聞き書き〕中田妙子さん
大地のエネルギーで病を克服。
田代原の放牧草原の風景を甦らせたい
- 14 〔聞き書き〕加藤隆太さん
伝統菓子「湯せんべい」の老舗の五代目として
雲仙を未来に引き継ぐ新しい観光を提案
- 18 〔聞き書き〕松島健さん
世界が注目した雲仙岳の噴火から学んだ
火山防災への普及に努める

- 天草
- 22 〔聞き書き〕山崎博文さん
国立公園にひっそりと立つ癒しの温泉宿
大自然のある土地の選択こそがオーナーの仕事
- 28 〔聞き書き〕船原英照さん
シーカヤックで上天草の無人島を巡る旅は
日々の疲れを解放する至福の「天草時間」
- 32 〔聞き書き〕金井憲昭さん
山男、天草の自然に目覚める
きれいな海と常緑の島を次世代へ

日本の国立公園は、アメリカなど世界のいくつかの国立公園と異なり、集落や農林水産業などが行われている地域も含めて公園区域に指定していることから、公園内に人々の暮らしや産業があるのが大きな特徴です。そのため、国立公園の管理は、これらの人々の暮らしや産業などとの調整を図りながら、地域の人々とともに進めています。

本誌の舞台である雲仙天草国立公園は、日本で最初に国立公園に指定された公園の一つです。当初は雲仙地域のみが指定されていましたが、22年後に天草地域が加わり、今の国立公園の姿になりました。雲仙温泉街の賑やかさ、ダイナミックな火山景観、天草の美しい海洋景観などの目に見える美しさに加え、外国人保養地であった歴史、山岳信仰・修行の場としての歴史、キリスト教の歴史など、さまざまな歴史に由来する独自の文化を持つていることも特徴です。

雲仙に暮らす人々は常に火山による大地の息吹を、天草に暮らす人々は内海の穏やかさや外

海の壮大さを、誰よりも肌で感じながら暮らしを営んできました。自分たちが生まれ育ったこの地域を誇りに思い、未来のためにこの地域の活性化や自然環境の保全に力を尽くしている人が多くいます。本誌『国立公園ものがたり』では、この地域を愛してやまない人々の声を集めました。

『国立公園ものがたり』は、国立公園制度100周年となる2031年にかけて行う「国立公園制度100周年記念事業」の一つとして、日本のすべての国立公園において作成する聞き書き集です。この『国立公園ものがたり』を通して、地域の宝である国立公園の自然、その自然とともに生きてきた人々の歴史、文化、ストーリーを見つめなおし、次の世代、次の100年にしっかりと引き継いでいただけることを願っています。

聞き書き集とは、話し手に自身の生き様を語ってもらい、その人の言葉をそのまま書き起こしてまとめたものです。口調や方言などもそのまま文章化することから、読み手は話し手の人柄や感情をリアルに感じ取ることができます。地域の人が紡いできた国立公園のストーリーを、地域の言葉で楽しみなさい。

雲仙天草国立公園

噴火が生んだ峻険な峰と、

硫黄の香り立ち込める“地獄”を擁する雲仙地域。

大小の島々が浮かぶ海が広がる天草地域。

荒ぶる自然と柔らかな自然という

対照的な地域に共通するのは、

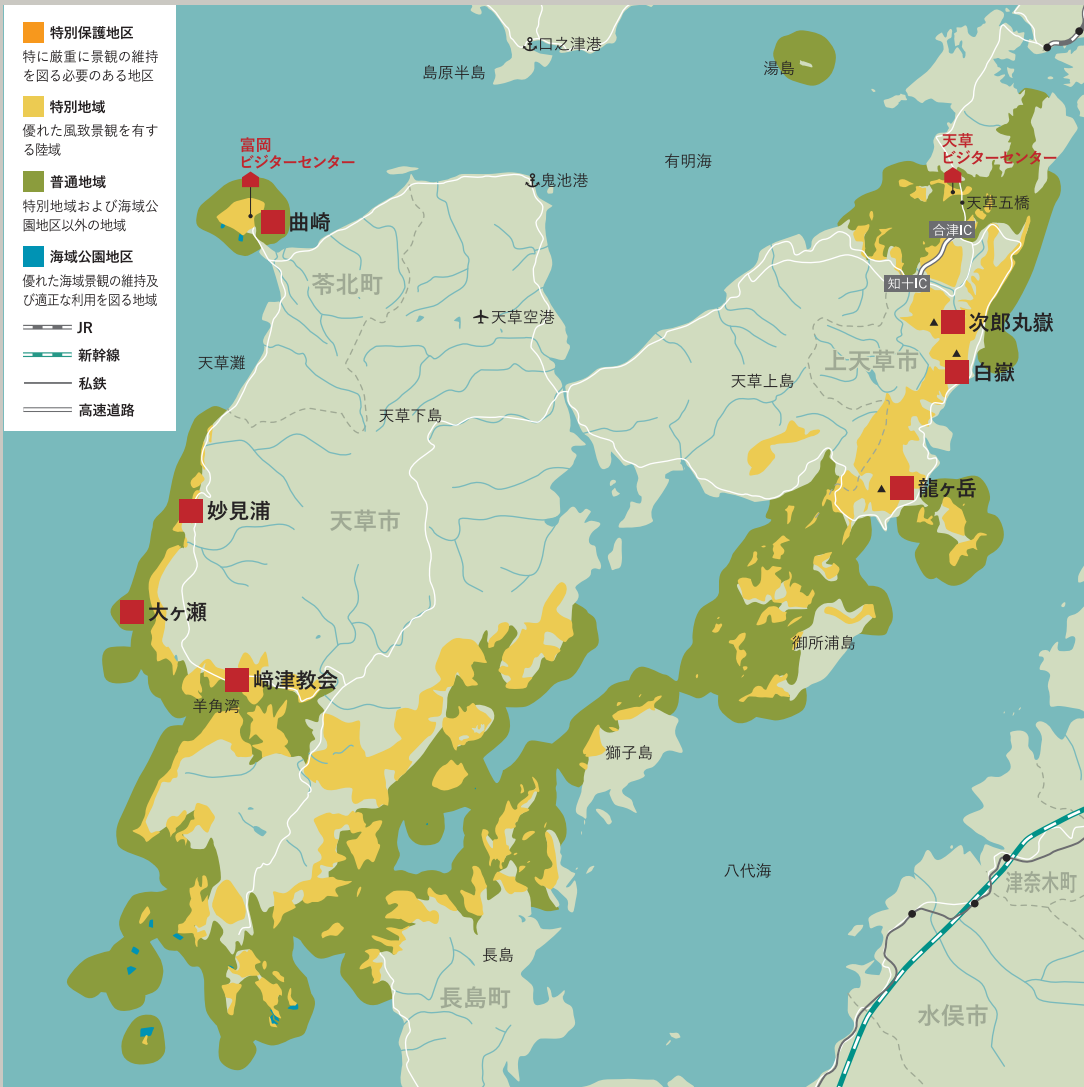
今日まで守られてきた自然を伝え継ぐという

人々の熱い思いです。

雲仙は国立公園の第一号 雲仙岳と天草の海が織りなす “水陸大展望”

1934 年、日本の国立公園第一号として雲仙地域が「雲仙国立公園」に指定され、1956 年、天草地域の編入により「雲仙天草国立公園」に改称。雲仙は 20 を超える山の総称である雲仙岳の火山地形がダイナミックに広がり、春のミヤマキリシマ、秋の紅葉が訪れる人の目を楽しませてくれます。一方、天草は 120 を超える島々からなる多島海。シーカヤックなど遊びのフィールドともなっています。天草^{しもしま}下島の崎津集落がキリシタンの歴史を刻んでいます。

指定年月日 | 1934 年 3 月 16 日
面積 | 陸域 2 万 8279 ヘクタール、海域公園地区 116 ヘクタール
エリア | 長崎県／熊本県／鹿児島県



雲仙天草国立公園 天草エリア



雲仙天草国立公園 雲仙エリア

天草の特徴

キリスト教の歴史を刻む

江戸時代、キリスト教は邪教とされ、教徒たちは厳しい迫害を受けました。それに反発した島原・天草の農民たちが起こしたのが「島原の乱」です。下島の崎津集落は、禁教下で信仰を続けた人々の歴史が刻まれています。



天草・下島の崎津集落。中央は崎津教会の天主堂。

藍より青い外海の美しさ

下島の西海岸は東シナ海に面し、荒波の浸食によってできた険しい断崖や洞門、岩礁が見られるリアス海岸を形成しています。「藍より青い」と形容されてきた天草の海が広がり、美しい夕陽が見られることでも知られています。



天草西海岸の鬼海ヶ浦（きかいがうら）。「日本の夕陽百選」の一つ。

波穏やかな海と緑の多島海

天草の島々は外海の東シナ海、内海の有明海、八代海に囲まれています。大小 120 の島々が浮かぶ多島海となっていて、内海の沿岸部は水深が浅く、波は穏やかです。緑の島と青い海のコントラストは天草を代表する景観です。



高舞登山（たかぶとやま）から望む天草五橋の夕景。写真提供／上天草市観光おもてなし課

雲仙の特徴

雲仙のもう一つの貌、閑閑な草原

火山活動によって形成された島原半島。雲仙温泉街周辺には、牛や馬を放ったいくつかの放牧草原があり、毒のあるミヤマキリシマを牛や馬が食べないことによって、広大なミヤマキリシマの群落が形成されていました。



放牧が今も続いている奥雲仙・田代原（たしろばら）。

かつて外国人の一大リゾートだった

明治から昭和初期にかけて、雲仙は主に上海に駐留する外国人たちの避暑地として発展し、欧米を始め世界各国の観光客が訪れました。ホテル、ゴルフ場や遊技場などが次々と整備され、ハイカラな街として知れ渡りました。



雲仙のホテルで浴衣姿でくつろぐ外国人観光客たち。写真提供／雲仙観光局

繰り返された火山活動の痕跡

雲仙火山は有史後、1663 年、1792 年、1990～96 年の 3 回、大きな噴火を起こしました。最後の噴火で誕生した平成新山は雲仙岳の最高峰となりました。雲仙温泉街にある“地獄”では、地下の火山活動を肌で感じることができます。



噴気立ち上る平成新山の火山岩尖。

聞き書き
中田妙子さん

大地のエネルギーで病を克服。

田代原の放牧草原の風景を甦らせたい



放牧草原の田代原。



田代原の周囲は紅葉する山々で囲まれていた。

余命3年と言われた病を抱えて

病弱な少女時代でした。

常に体が弱く思うように学校にも行けず、小さい時から病院通いで腕には注射のあとだらけ。

祖母が尼僧で、私が生まれた南島原の深江には御堂がありました。18歳のとき自分も尼僧になろうかな、跡を継ごうかなと考えて、19歳で福岡に修行に行っただけです。そのうち祖母が亡くなった後、御堂にあったお釈迦様の跡を継ぐ人がいないので、資格さえ取つてくればいつかは継げるだろうっていう気持ちでした。福岡県篠栗のお寺に修行で一年行って、

そして今度は和歌山県の高野山に行くわけですね。それが20歳のとき、1979年です。

金剛峯寺の専修学院っていう尼僧学院に第二期生で入ったんです。修行は厳しく、朝3時に起きて勤行して、高野山大師教会の掃除をして、そして高野山のお山を歩く修行までして、いろんな専門の先生たちからお経や仏教のこととかを学んだりする。けれども、体が弱かったのでもた病気をし、修行についていけず途中で止めて一旦また福岡のお寺に帰ったんです。でも修行が途中で止まったらもう1回やり直しになるわけです。また一からという形で、結局2年間かけて尼僧の資格を取らせてもらったんです。

修行を終えて福岡に帰ってきて、でもまだ体が悪く、なかなか歩けなかったんです。「なんでだろう、なんで歩けないんだろう」って思ってた。福岡の病院でヘルニアの手術をしたんですけれど、手術をしても足が上がらない。3回手術してどうにかやっと歩けるようになったんです。

尼僧の資格を取るとなれば、お礼奉公もしなきゃいけないですよ。だけど、体力が弱っていたから車いすの状態が続き、お礼奉公もできない状態で、すごく胸が痛かったんですが、苦渋の決断でふるさとの南島原に帰ることにしました。

帰ってみると、やっぱり祖母がやっていた御堂が雨ざらしになってたことが一番気になって、このお釈迦様を誰かちゃんとみてくたさる人がいれないなっていう気持ちでした。私の体が動けばと思っていたんですが、私の動けない原因は、福岡で受けた3回の手術のときは全部ヘルニアっていう診断だったんです。自分としては違うんじゃないのかと思ってたところ、「今度は首を手術する」って言われたんです。けどもう手術したくないと思って。でも「このままだと余命3年もないですよ」って言われて、それがすごくショックでした。正直言ってお金もあるわけじゃないし、手術はしないと決めて。それでなにに救いを求めるかっていったら、自分の身を自然に任せたいという気持ちだったんですね。自然の力でなんとかっていう気持ち。

歩けないし、車も乗ってはいけない状況だったんですけど、深江に帰ってきてから車がないとやっぱりどうもできない。だから足を使わないで車を運転できる免許をなんとか取りました。取ったけども痛みは全然取れないし、もう薬にもすがらないで、普賢さん信仰が盛んだった雲仙のお山に、自分の身を委ねてみようという気持ちになったんです。

夢に見た場所、田代原と出会う

雲仙に一切経のお滝場があるんですよ。真冬の朝3時に深江の自宅を出て車でお滝場に向かうんです。ああいうときって不思議なものですよ。もう怖さ知らずですよ。雲仙なんか冬場は雪が凍るんですよ。そういうことわからないから、普通のタイヤで行って怖い思いをしながら必死の思いで駐車場まで行って。

ミヤマキリシマ。夏の暑さで秋に開花。



奥雲仙の山中にぽっかりと開けた草原。ミヤマキリシマが咲き、放牧された牛たちがゆっくりと草を食んでいる。かつて雲仙岳の原風景の一つであった放牧草原が唯一残っているのが田代原です。深刻な病を抱えて千々石断層が走るこの草原を訪れ、自然の力に癒やされ助けられた自らの人生をこの地に捧げてきた一人の女性がいます。その女性は、かつて多くの人々が利用し、人々の心を癒やしてきた放牧草原を以前のように美しく維持し、後世に伝え継ぐと、今も献身的に活動が続いています。

なかた・たえこ／NPO法人「奥雲仙の自然を守る会」代表。1959年、南島原市生まれ。祖母の寺院を継ぐために高野山（こうやさん）専修学院で尼僧（にそう）の修行を積む。卒院後、脊髄の病で歩行もままならず、薬にもすがらないで夢に出てきた場所でもある雲仙岳の自然に身を任せることを決め、奥雲仙の田代原に自らの修行道場として「寿妙院（じゅみょういん）」を創建。1998年に開業した「グリーンツーリズム体験民宿」は「奥雲仙自然村」を経て「NPO法人奥雲仙の自然を守る会」となる。ミヤマキリシマが咲き誇るかつての放牧草原を復活させるための活動を続けている。



自然保護、森作りなど会の活動は高い評価を受けている。

駐車場から滝までは普通なら歩いて15分。でも私歩くことはなんとかできたけれども、杖ついて行かないといけないので、結局は時間かかるわけですよ。3時間ぐらいかけてゆっくり下って滝場まで行って、真冬に水行をして。足が悪いからなかなか立つこともしんどいですけど。なんとか一人でお滝場に入って。それで、終わって着替えてお勤めして、百巻お経をあげて、そしてまた帰ってくる。帰り着くのはもう夕方ですよ。それを1ヶ月間、願をかけて毎日行きました。福岡から帰って、私は自分の修行の場所をずっと探していたんです。私が夢枕で見せられていた木と洞窟がある山があって、その場所をいろんなところ探したけど見つからなくて。でも探してる山は見当が付いて、それが

九千部岳^{くせんぶだけ}かなと思っていたのですが、洞窟が見つからない。気も焦っていて、私自身が途中でダウンしたらお釈迦様は誰がみるのかと思っていたときに出会ったのが、目の前に九千部岳があって、雲仙の一切経も近いこの田代原なのです。そこで田代原の人たちにお願いで受け入れてもらい、修行の場所でもある私の家を寿妙院として建てたんです。田代原の人たちはもともと先代の頃からご縁があり、先代がおられた深江までずっとお参りに来てらっしゃったんです。そのときの私は余命を宣告され落ち込んでいたけど、それを周りには黙ってたんですね。私にもしものがあつたとき、お釈迦様をみてくださる人がいてくれたらっていう意味で、田代原の人たちだったらこのお釈迦様をちゃんと大事にして見守ってくださいだろうって思ったんです。それで1985年に思い切って御堂をここに建てさせてもらったんですよ。私の修行道場としてです。それが私と田代原と、そして国立公園との関係の始まりとなったんです。

この場所が持つエネルギーの力なんです。それでここまで元気になったならば今度は九千部岳の登山に挑戦してみようっていう気持ちにもなつたんですよ。最初は私を支えてくれている人たちと挑戦したけれど、なかなか途中でしか行けない状態でした。下を向きながら歩くもんだから、もうしんどいですよ。それでも、足下を見ると踏まれても踏まれてもきれいに咲いている草花があるんです。それを見たら、すごく勇気をもらえたわけなんです。疲れ果てて一人涙ぐんで、もう諦めそうになるけど、この草花は踏まれても踏まれても「頑張れ、頑張れ」って言ってくれてるようで。上まで行って帰ってくるときには「また戻ってきたね」って話しかけてくれる気がして。その草花を見たとき、私以上に苦しんでいる人や辛い人がいるはずだから、なんとか自分とはかく元気になって苦しんでいる人たちを助けようと思って頑張ってたんです。



子供たちと一緒に草原の草刈り。
写真提供 / 奥雲仙の自然を守る会



森林環境教育のフィールド「遊々の森」に指定された牧場の森。
写真提供 / 奥雲仙の自然を守る会

でも当時の私の体力では、山の上は酸素が薄く感じて、もう朝の空気を吸うことも苦しかった。だけれども不思議なことに、月日とともに私自身がどんどん元気になってくるんです。足も動かれるようになったんです。やっぱりまだ痛みはある状態なんですけど、杖をつかないでいいような状況になったわけなんです。横になっている回数がなんでか少なくなり、なんでだろうとか思っていたんですが、

国立公園という枠の中で作った 皆の居場所

私の修行道場を建ててからは、修行の傍ら、訪ねてこられる方の相談に乗ったり助言したり。来られる方はなにかに悩んでいる方が多いんですよ。そんななか、ある農政局の方から「都市農山村のグリーンツーリズムに登録されませんか」って言われて、1998年にウェルネス体験ができる「グリーンツーリズム体験民宿」を始めたんです。

グリーンツーリズム体験民宿は私が1人でやってるつもりでしたが、気付いたときには、お料理の上手なお母さんたちとか、草むしりは抜群にうまいっていう人たちとか、そういう人たちに私はいろんな形で助けられてやっていたわけですよ。だから、たどお手伝いしに来るだけじゃなくて、この人たち一人ひとりが生き生きできて、都会から来る人たちが癒やしを求めて来られたときに、おばさんたちの声で元気になったりする、そんな場所になっています。2003年に「奥雲仙自然村」を主宰したのがまさにそういう場所なんです。

でも、やってるうちにはいろんな壁にぶつ

かったりして。奥雲仙自然村は1個人がやっていることなので、壁一つ直すにしても、ゴミの落ちている道をきれいにしていきたいと思っ掃除するにしても、1個人ではできないことが多いということがわかったんです。というのは、ここがいわば国立公園の中だから。民宿をするのもかなり厳しかったんです。都会から来られた方が自然歩道に生えてきた草を刈ったりするのも勝手にはできないですね。

きれいにしたいのに、なかなかできない。国立公園だからこそきれいにしたいのにできない。当時はそれがもう不思議でならなくて。今でこそわかってきたわけですけどもね。それで、NPO法人を立ち上げようと、2005年に農山村体験学習ができるNPO法人「奥雲仙の自然を守る会」を立ち上げました。

今、生きがい支援でお年寄りのみなさんにも頑張ってもらい、いろんな体験活動などをしてるんです。2005年から遊歩道や県道周辺の清掃活動を始め、道路清掃許可を取って、国交省のアダプト制度をつかって清掃活動したりとかしたんです。また、林野庁が推奨している自然環境教育の場「遊々の森」の一つとして、「奥雲仙牧場の森」（田代原地区の森の一部）が指定されました。その森で、地域の子供たちが雲仙のお山のことを知ったり、自然体験をしたりしています。私が動けなかった体から今自由に動き回りいろんな活動ができるのも、ここは千々石断層



田代原を見下ろす吾妻岳が夕陽に染まる。



田代原のミヤマキリシマも秋なのに開花している。



放牧されている牛たち。しかし草原維持のためには数が足りない。

上で、地層のエネルギーがあり、そこにはなにかほかとは違うパワーがあるはずで、そのおかげなんだと思っっているんですよ。
元氣になって初めて、今いる場所が心引かれるかけがえのないきれいな場所であるということがわかるようになってきたんです。草原に咲いているツツジもそうで、すごい色鮮やかなツツジ、ミヤマキリシマがあるではないですか。このツツジは仁田峠とかともまた違っていろんな色が出る。こういう場所をただみんなに知ってもらいたい、活用してもらいたいと、保全活動、清掃活動をNPO法人を立ち上げやってきたんです。

甞れ、ミヤマキリシマの咲く放牧草原

雲仙のお山は火山地なんですね。この田代原草原も大昔の火山活動や地殻変動などでできた盆地なんです。吾妻岳と九千部岳も断層の影響で地殻変動が起き一つの山が二つに分かれてこの田代原の盆地ができたと言われているんですよ。ミヤマキリシマという花は荒れた火山地にしか咲かない花で、ここも昔はミヤマキリシマがもつとたくさん咲いていたので、それはきれいだったそうです。時が経って手入れすることが少なくなった今、樹林化が進んでいますけど、以前は見渡すところほとんどが草原で馬などがたくさん放牧されていたそうです。

このツツジは仁田峠や池の原のミヤマキ

景が唯一残った田代原の放牧草原に色とりどりに咲くミヤマキリシマをひと株、ひと株きれいにしていたならば、そして樹林化を食い止め、整備して、景観もきれいになってみんなが癒やされる場所になったならばどんなに良いことかと考えました。他人がするんじゃないくて、自分たちでしよう、守っていくよって。それを言いつづけて実行して、40年頑張ってきました。

それが私からの元氣にしてくれた自然への恩返し、協力していただいた田代原の人たちや仲間への恩返しじゃないかなと思っっています。おかげ様で2022年に未来に残したい草原の里10選に選定され、林野庁の風致探勝林にも選定されました。これからまだまだ元氣な間は頑張ります。

田代原のミヤマキリシマとヤマツツジ

周囲を山に囲まれる中、緑が広がる美しい草原「田代原」は、ここが雲仙の山中だとは思えない開放感に満ちた別世界だ。ミヤマキリシマの調査を行っている長崎大学大学院客員研究員の山本哲也さんによると、田代原のミヤマキリシマとは、近縁のヤマツツジと長期的に交配しつづけている集団だという。ピンク色の花の遺伝子をもつミヤマキリシマに、赤色の花の遺伝子をもつヤマツツジが交配することで多様な色の花々が咲く。そんな花が間近に見られる場所は田代原草原しかない。樹林化が進む田代原の草原を維持するにはミヤマキリシマの中に入り込むイヌツゲやノイバラなどの雑草刈りをする人手が必要で、現在、中田さんや山本さんらの努力でかううじて草原は形を保っている。理想は、かつてのように放牧された多くの牛や馬が一日中草を食むことによって草原が維持される形だが、畜産業の低迷など実現に向けて越えるべきハードルは高い。雲仙の原風景「放牧草原」復活への挑戦はまだ道半ばだ。



樹林化が進む放牧草原では牛たちがいる場所もすぐにはわからない。

リシマとは少し違っていて、色とりどりの花が咲いて、その色の鮮やかさは見ごたえがあるんです。私が活動している理由の一つが、この光景と雲仙のお山を後世に残したいと思うからです。

私はここが国立公園だつてことは知っていたけども、日本初の国立公園だつていうことも知らなかったんですよ。「この田代原は日本で初めての国立公園になった公園の一角にあるんですよ。そして雲仙全体に広がっていた放牧草原で、残ってるのはここだけなんだよ」っていうことを今度は地元の人たちや子供たちがちゃんとわかってくれて、お山を

守れる人材になってほしいっていう願いでやってきたわけなんです。

2007年に農山村体験で受け入れた修学旅行生から「国立公園なのになんでこんなにゴミだらけで汚いんですか?」と言われました。この一言はきつかったですね。それで頑張ったんです。もつと地元の地域の人がこの国立公園を大事にしていけるようにと。やっぱり国立公園はなにもできないっていう間違った偏見が伝わってしまった。結局は国立公園はなにもできない、なにも手を付けられないとなっているから利益を求める企業さんたちはまず振り向かない。「やっぱ



ミヤマキリシマは、株に入り込んだ雑草を刈らないと枯れてしまう。

り利益が付かないところは……」ってなってしまう。そういうふうには、だんだんだんだんいろんなしがらみに締め付けられて、国立公園はなにをするにも厳しいだけのものになっちゃったんです。

でも、だからこそ違うんだよって。日本初の国立公園だったからこそ、この田代原も、雲仙のお山も大事な場所なんだよって伝えたんです。そして雲仙の北側に位置する田代原はなにもないところだけど、ここは千々石断層という断層上にあって、すごいエネルギー、パワーがある場所なんだよ。そのエネルギーをつかみ取って元氣になるのはみなさん方だよと言いたいですね。

そんな国立公園の中にある、放牧草原の風

九千部岳をバックに中田妙子さんと山本哲也さん。



『食べる温泉』
湯せんぺいと遠江屋

うちの屋号が遠江屋と言いますので、うちの先祖は遠州浜松から雲仙に來たという歴史があります。私も加藤家の本家がすぐ近くにあつて、雲仙温泉で一番古い宿「湯元ホテル」をつい最近まで経営しておりました。

加藤家はもともとこの雲仙温泉街のある島原藩から^{やましろやく}留役という役をいただいて、ミヤマキリシマや山の管理だけではなく島原の乱で荒廢した寺社仏閣の建て直しもやっています。大きな戦による荒廢は激しく、復興の資金に充てるため、雲仙の地獄から湧く温泉

を利用して湯壺を開き温泉の利用料や宿賃をいただきはじめてからは、湯守役^{ゆもりやく}としてお湯を管理し、島原藩に税を納めていたそうです。今から340〜350年前の話だと思います。

私の4代前に分家をして、この場所で小さな「木賃宿」を始めたのが、「遠江屋」の始まりです。温泉はここで湧いていないので、たぶん湯元さんの温泉に入りいていたんだと思います。

2 代目で飲食店になりました。戦争中に旅行のお客様が減ってしまったなかでどうやって生きていくかということで、業態を飲食店に変えたようです。

3代目の私の祖父の代からは今のこういうお土産を扱うようになりました。たぶんここらあたりは米軍に接収されて、ホテルが米軍の保養所になっていた頃だと思います。祖父は戦後雲仙に戻ってきて、祖父の母親がやっていた飲食店の手伝いをしながら、普賢岳の中腹ぐらいまで登って行って、ラムネを売ったりしていたそうです。湯せんべいの製造を始めたのもその祖父の代からです。

4代目、私の父の代で湯せんぺいを主軸にした土産品店になって、5代目の私が今、手焼きの湯せんぺいにこだわりながら、新しいお土産を開発していくことをやっています。

湯せんべい自体は今から130年ぐらい前にできたお菓子です。もともと島原藩のお殿様がとても湯治が好きな方で、雲仙にお殿様がいらつしやるなら地元のお菓子を献上したいということで考えられたのが、この湯せんべいだったようです。お風呂に入って健康になるんだつたら、食べたらもっと健康になるだろうとお殿様がおっしゃったという逸話があつて、「食べる温泉」ということで湯せんべい、温泉が入つたお菓子を作ることになったというふうに聞いています。

外国人避暑地として栄えた温泉街

雲仙の温泉は、自然湧出した温泉を宿や温泉施設に引くということしかできないんですね。お湯が湧く「地獄」自体が移動している



遠江屋の店内。土産物を求める人で休日は人が絶えない。

聞き書き
加藤隆太さん

伝統菓子「湯せんぺい」の老舗の五代目として
雲仙を未来に引き継ぐ新しい観光を提案



雲仙の伝統の和菓子「湯せんぺい」。焼き立ての香ばしい香り^{ほの}と仄かな甘味、サクサクとした食感に、店を訪れて食べた観光客から笑みがこぼれます。雲仙温泉街で老舗の土産品店を営み、湯せんぺいの手焼き製法にこだわる主人が、雲仙観光の担い手として見据える国立公園としての雲仙の未来とは？ かつて外国人避暑地として賑わった時代、団体旅行客を迎える大型ホテルが居並ぶ時代を終えて、雲仙温泉街は新たなステップを踏み出しています。

かとう・りゅうた／透江屋本舗五代目主人、雲仙観光局理事。1978年、雲仙生まれの雲仙育ち。東京の大学に進学し、卒業後、飲食店を運営する会社に勤め、東京と福岡で店舗経営を学ぶ。30歳で雲仙に戻り家業の土産品店「透江屋」を継ぎ、商店街のリニューアルに携わる。以後、雲仙温泉街の伝統菓子湯せんべいの「純一枚手焼き製法」を継承する一方で、新商品の開発、雲仙をアピールするイベントなどに取り組み、雲仙の自然と文化を未来へと継承する新しい雲仙観光をリードする。



湯せんべいを焼く加藤さん。



時には湯気で視界が真っ白になる雲仙地獄。

ないとお湯が湧かない危険性がある。ホテルや旅館、共同浴場のみなさんは、源泉の管理には大変な苦勞をし、知恵を絞られていると思います。

温泉街は明治期に外国人の避暑地としての時代が始まるんですけども、香港や上海にいた方が、夏とても暑いのでアジア圏でバカンスを楽しめるところがどこかないかというので探されていたそうです。それで香港・上海から近い高原リゾートということで雲仙が上海の新聞で紹介されて、そこから外国人避暑地としての歴史が始まっていったんです。今から130年とか140年前の話ですね。

雲仙は標高が高くて涼しいし、温泉はあるし、風景がヨーロッパの山の風景にすごく似ているということで、西洋人の方たちにすごく気に入っていただけたらしく、長崎県が主導して高原リゾートとしての開発が始まり、ゴルフ場やテニスコート、ダンスホール、弓道場、乗馬場などが明治時代から昭和初期にかけて温泉街に整備されました。

当時の写真を見ると、避暑にいらっしゃっているのは西洋の方がほとんどです。夏期の3ヶ月間、バカンスで過ごすわけですね。万国旗を下げてダンスパーティーをしたりとか、本当に諸外国の方々が温泉を社交の場として夏の間使われていた。当時の日本人のほとんどは、まだ着物を着て、雪駄を履いて、素朴な家に住んでいるような時代で、たぶんここはもう日本ではないような状態だったはずなんです。仲居さんとか給仕さんたちも、英語なりロシア語なり片言でみなさんとお話をされていたようです。第2次世界大戦直前まで外国人の方たちがいらっしゃって、「もうお会いすることはないかもしれない、明日から敵国になる」ということでみなさんが惜しみながら別れていくということが、開戦前の夜にあったそうです。

外国人避暑地の時代をきっかけに初の国立公園になって全国に名を馳せたということがあるので、雲仙の方たちは国立公園第一号ということにすごくプライドをもっていると思います。

います。

以前「雲仙プラン100地域づくり委員会」の準備委員会で「お山の情報館」の別館の倉庫みたいな部屋を借りて、毎週集まって夜な夜な話をしていたとごころですが、たまたま休憩時間に倉庫のなかを見ていたら、雲仙の鳥瞰図のパネルが出てきたんです。描いたのは吉田初三郎という明治、大正、昭和に活躍した鳥瞰図師です。今の温泉街の湯せんべいのパッケージの絵も吉田初三郎の絵で、赤、黄、緑、青と、ちよつと暖色系のカラーがメインの鳥瞰図なんですけど、出てきた鳥瞰図はそれと同じアングルなんですけど、青みがかってちよつと涼しげな色彩で、なにか品がいいというか。しかも、地名が全部英語で書いてあるんですね。上海から長崎を経由して雲仙に来る西洋人たちの船に置いてあった雲仙のパンフレットだったんです。

よく見ると鳥瞰図の下に小さな文字で案内が書いてあつて、たとえば「K i n u g a s a W a l k」だと絹笠山の登山についての案内が書いてあるんですが、100年以上前に書かれた、しかも外国人向けに書かれたもののに、今と同じルートで、まったく同じ景色が描かれていて、本当に昔も今もずっと変わっていないんです。小学生の頃、国立公園で「取るまい、折るまい、捨てるまい！」という標語を呪文のように唱えながらごみ拾いしていた時代があつたんですが、地元の方たちや、国や県、市町村の方たちが「雲仙を守っていいこう」ということをずっとされてきたお

ばいいとかではなくて、古き良き時代の雲仙の楽しみ方を現代風の雲仙の楽しみ方に置き換えて、それを体験し思い出としてお持ち帰りいただくということを考えています。

たとえば、「天幕レストラン」というのを雲仙観光局でやっているんですが、それは避暑地時代の写真のなかに、白雲の池で天幕を張って、ランチやカフェタイムを過ごしていたという写真があつて、これも一回やってみようということで始めたんですね。雲仙温泉街には一流の料理人さんたちがいらっしゃるので、島原半島の一流の料理人さんたちにもお声掛けをして、地元の旬の食材、野菜、お魚、お肉だったりを1品ずつ丁寧に作っていただいて、自然のなか、天幕の下で食べていただくというイベントです。

あと今やっているのが「プレミアムナイト」っていう夜の星空を見ていただく企画で、ゴルフ場を夜貸し切りにして、そこで星空を見ていただいたり、プロジェクトンマップピングを見ていただいたりするんですけども、温泉街の住民である私であったり、お肉屋さんのお嫁さんだったり、ゲストハウスのオーナーだったりとか、ナビゲーターとしてお客様をご案内するんですね。そこには裏テーマとして、この自然を守っていくということをお客様も一緒に考えていただきたいというのがあるんです。

雲仙は国立公園第一号とか、どうして温泉が湧くのかとか、この自然が当たり前ではないということをお話して、我々が自然を



外国人避暑地時代の写真。左は屋外でのパーティ風景、右はスカート姿で普賢岳に登頂する観光客。
写真提供／雲仙観光局

陰で、こういう景色が今でも同じように見れるんだと気付いたんです。

雲仙の自然を 未来に継承するために

雲仙に帰ってきた当時は、雲仙のことを知っていたかどうかと、いろいろなイベントをやっていたんですけど、今はそのイベントにいかにか「雲仙らしさ」を乗せていくかという狙いを持って、イベントを企画するようにしています。ただ楽しければいい、おいしけれ

大切にしていきたい、受け継いでいきたいという気持ちをお客様も一緒に感じていただいて、雲仙旅行したことをきっかけになにか一つ行動に移していただけるようなことにつながったらいいな。この国立公園の大自然のなかで行うイベントだからこそ、ただ「きれいだね」「楽しかったね」で終わりじゃなくて、最後に落としどころを持つていくのは、シナリオとしてやっぱりそこじゃないといけない。みたいな。

ただ、押しつけがましくなつてはいけないうるか、あくまでレジャーなので、さじ加減には気を遣います。「自然守りましょう！」みたいなことじゃなくて、「きれいだすよねえ」とかっていう流れのなかで、なにかふつとそこに収まるというのが我々ができることなのかなという気がしています。あとはそれをどう思われるかというのは、お客さまの感じ方次第なのかなと思いますね。

温泉（うんぜん）神社と普賢信仰

修験道の時代、雲仙岳は温泉山（うんぜんさん）として知られていた。比叡山や高野山と並ぶ修験道の霊山として「天下の三山」と呼ばれ、僧坊は1000を数えたという。その鎮守の役割を担うのが雲仙温泉街にある温泉神社で、創建701年、行基が温泉山満明寺（まんみょうじ）と温泉神社四面宮（しめんぐう）を運営し鎮守とした。島原半島にあった18の温泉神社の本山である。雲仙岳は「お山」「お普賢様」と呼ばれ、雲仙温泉街の人だけでなく、島原半島の人々にも親しまれている。遠江屋の加藤さんも毎朝、温泉神社と満明寺に手を合わせて朝の仕込みがスタートするという。普賢岳には温泉神社の奥宮にあたる普賢神社がある。

聞き書き
松島健さん

世界が注目した雲仙岳の噴火から学んだ 火山防災への普及に努める



1991年、雲仙・普賢岳で発生し、大きな災害をもたらした火砕流の映像は一般人のみならず、世界の火山学者たちの目を釘付けにしました。この噴火を境に、島原半島における火山研究が進み、同時に防災の意識が高まり、対策も進みました。雲仙はダイナミックな火山活動と火山地形を見られる国立公園であると同時に、火山防災の先進的なモデルエリアでもあるのです。火山との共存のあり方を提言します。

まつしま・たけし / 火山学者。1960年生まれ。北海道大学大学院卒（理学研究科地球物理学専攻）。日本学術振興会特別研究員を経て、1992年、九州大学理学部附属島原地震火山観測所（現在、九州大学大学院理学研究院 附属地震火山観測研究センター）へ。専門は固体地球物理学。90～96年の雲仙岳噴火の際、92年より現場で観測及び防災のための情報発信の中心的な役割を担う。雲仙岳災害記念館の設立にも関わる。現在、活発な火山活動が続く霧島山を中心に研究を進めている。

雲仙噴火災害の助っ人として 北海道から九州へ

私が通っていた札幌南高校では1年生のときに地学巡検といって、札幌市内の近くの山とか川に出てる岩石を調べるという必修授業がありましてね。南区にある石山（定山渓）間を地学の先生と巡検して回るツアーで、いろんな岩石をサンプリングしたりして、夏休み後にレポートを出すというものなんです。その場所が私の自宅のすぐそばだったんです。それまで見ても全然気にしたことなかった地形とか岩石とかには意味があるんだと、こういうふうにできたんだと知って、これはおもしろいな、と。それで、地球科学研究所っていう部活に入部して、岩石の採取や化石の採掘をしたり、あとは天文観測や気象観測なんかも含めてずっと活動してました。

高校に入ったのが1976年なんですけど、77年という年が有珠山の噴火の年なんです



1993年4月、噴火で成長する第10ドーム。
写真提供 / 雲仙岳災害記念館



1991年5月、猛スピードで北上木場町の民家に迫る火砕流。
写真提供 / 雲仙岳災害記念館

すよね。札幌市内も結構火山灰が降りましたね。室蘭市の母の実家から噴火がよく見えたので、山の形が変わっていく様子をずっと定点写真のように撮っていました。今、火山の業界で火山のいろんなことを研究してますけど、有珠山の噴火を見たのは一つの契機になったんじゃないかと思います。大地は動いてるっていう証を目の当たりにして、やっぱり非常に感激しましたね。

その後、日本学術振興会の特別研究員、いわゆるポスドクの研究員になったんですが、そのときに雲仙・普賢岳の噴火があったわけです。1991年の6月に43名亡くなる火砕流が発生し、人が足りないということになって、特にこの観測所にはそのとき常駐のスタッフが4人しかいなかったんで、1992

年の3月に公募がかかってそれに応募して北大から私が採用されました。地震計の設置とか、フィールド経験があつて即戦力になる人じゃないと難しいということがあつて。

赴任した直後からこのセンターの近くの野球場から毎日自衛隊のヘリで飛んで、空から写真や赤外線映像を撮ったりしてました。降りてくると所長の太田一也先生がマスコミを相手にいわゆる囲み取材で状況を話すんですけど、それもだいたい2ヶ月後ぐらいから「もう君やってください」って言われて、私がコメントするようなことをやってましたね。

雲仙が世界に注目されたのは、まず火砕流の映像がそれまでなかったというのがあるんですよね。マスコミも防災関係者も火砕流という言葉すら知らなかった。東側斜面にできた溶岩ドームは今「平成新山」という名前になってますけど、こういう形の地形ってのは実は日本各地にあるんですよ。でも、それができていく様子を見られたっていうのは、雲

仙岳が唯一なんです。1日に多いときで30万立方メートルぐらいのマグマが地下から出て、どうやって溶岩ドームが成長していくのか、世界の研究者もみんな注目して見ていました。ライブに溶岩ドームや火砕流の発生を見られたっていう意味で、雲仙は非常に価値がある火山なのではないかなと思いますね。自衛隊が撤収したのが1996年の6月で、行政への対応、防災の対応をやはり5年間で随分私も学びましたね。研究だけじゃな



2024年11月に行われた平成新山の調査登山。
自衛隊、消防、警察なども同行する。
写真提供 / 地震火山観測研究センター

いと。研究した成果をいかにしてマスコミとか、市の防災担当者とか、ゆくゆくは市民の方に提供して、対応してもらうか。サイエンスだけやってればいい分野とはちょっと違うんだということですね。

情報を出すということが、逆に言うとバニクを起こさない一つの理由なんです。たとえば当時もデジタル無線はあったんですけど、警察はわざと住民が受信できるアナログ無線で火山情報を流していたし、自衛隊が常時ハンディカムで撮影している溶岩ドームの映像が地元のケーブルテレビで24時間放映されていたんですよ。火砕流が起こってパニックと広がっていく様子を逐一市民が見れる状態なんです。映像の音声は自衛隊の無線が流れ



ゴルフ場の近くにある矢岳はピラミダルな山容がよく目立つ。

てで、それを全部市民が聞ける。
だから住民はちゃんと正しい情報、質の良い情報を選択して入手して、それで自分で危険性を判断して行動すればいいというのが防災の基本だということも、そのときの災害から学んだ点ですね。

火山である雲仙の ポテンシャルに目を向ける

島原半島の形成が430万年前ぐらいからスタートして、今の雲仙岳の辺りで噴火が始まったのはだいたい50万年前と言われているんですね。

そういうことも噴火の前は全然わからなかったんですよ。そんな調査すら行われてな

かったんで。で、地下がどうなってるかというところで掘削もやって、それによってだいたい50万年間で1200メートルぐらいの火砕流とか土石流の堆積物が島原市や南島原市に堆積してるってことがわかったんですね。

たとえば1792年の噴火のときは、溶岩流が流れて、地震で島原市の眉山が崩壊して津波が発生したのですが、今回の噴火でも、島原市の住民はまた山が崩れるんじゃないかと、溶岩流が流れ出すんじゃないかってことばかり気にしてたんですね。

でも、調査をしていくと、実はそれはむしろ珍しいケースであって、雲仙岳は、溶岩ドームができてそれが崩壊して火砕流が発生するという、非常に活発な活動をしてきた火山だったということだったんです。周辺の地形を改めて見てみると、これも溶岩ドーム、あれも溶岩ドームだって。

たとえば1792年に崩壊した眉山もだいたい5000年前ぐらいに平地からできて溶岩ドームだということがわかったんですね。地下には非常に厚い先ほどの堆積層があって、眉山はその上に乗っかってるだけなんです。非常に軟弱な地盤の上に乗っかってる溶岩だったから崩れたんですね。それまでただ単に地震があって崩れたんだとみんな思っていましたから。

こういった知見は今後の防災にも役立つし、サイエンスとして非常に興味を持つ人も増えてくる。そこがおもしろいところでもありますね。

雲仙市の雲仙温泉街って窪地になってますよね。あれはたぶん大昔の噴火口なんですよね。火口の中にみなさん今暮らしてるわけなんですけど、大昔の噴火口でありますし、次に噴火しないっていう確約はないんですね。実際に1960年代に水蒸気噴火みたいなことが起こっています。ホテルを作るんで地面を掘っていたら水蒸気が噴出して作業員の方が5名亡くなっているんです。人工的に起きたともいえますが、実際に水蒸気の溜まりがあってそれが噴出したんで、メカニズム的には水蒸気爆発と変わらないんですよ。

そういう噴火のポテンシャルっていうのは日本中にいくらでもあって、2014年には御嶽山の噴火で63名の死者・行方不明者が出た大きな被害がありましたけど、あれは噴火としてはそんな大規模ではない水蒸気爆発です。しかも1時間ぐらいしか続かなかったんですけど、たまたま300人以上の人が山頂の噴火口のそばにいたので、大きな災害になってしまったということなんです。

水蒸気爆発って本当に小規模なものから、大きなものだったら磐梯山の崩壊のようなものまであります。平成新山のようにマグマが出てくるのであれば、地殻変動や地震といった予兆現象があるので、だいたいどこにいつ出てきそうだったということはわかるんですね。けれど、水蒸気爆発に関してはもうほとんど予知ができない。そういう噴火のポテンシャルが島原半島のあちらこちらにあるんですね。

もちろん観光地としても有名で、雲仙温泉

街だけでも相当な数の観光客が訪れて、経済的な効果もある。生きている火山活動が見られるってすごく良いことだと思います。だけど「危ない水蒸気爆発の可能性もあるところなんですよ」ってことを火山防災協議会で言っています。眉山だって昔の溶岩ドームなので崩壊する可能性もあるし、普賢岳の平成新山も崩れる可能性があるんだよ。実際に災害が発生してから「想定外でした」ではないんじゃないかと我々は言ってる、地元の方々と一緒に今動きはじめてるところです。

火山防災協議会には消防や警察、地元の防災機関の人とか入ってますし、観光団体、市の方々が入ってますのでね。風評被害が起きないよう、うまく観光との着地点を見出すのが行政の仕事ですから、議論に蓋をしないように指摘するのは我々火山専門家の仕事だと思っています。

この体験と知見を 後世の人々に伝え継ぐ

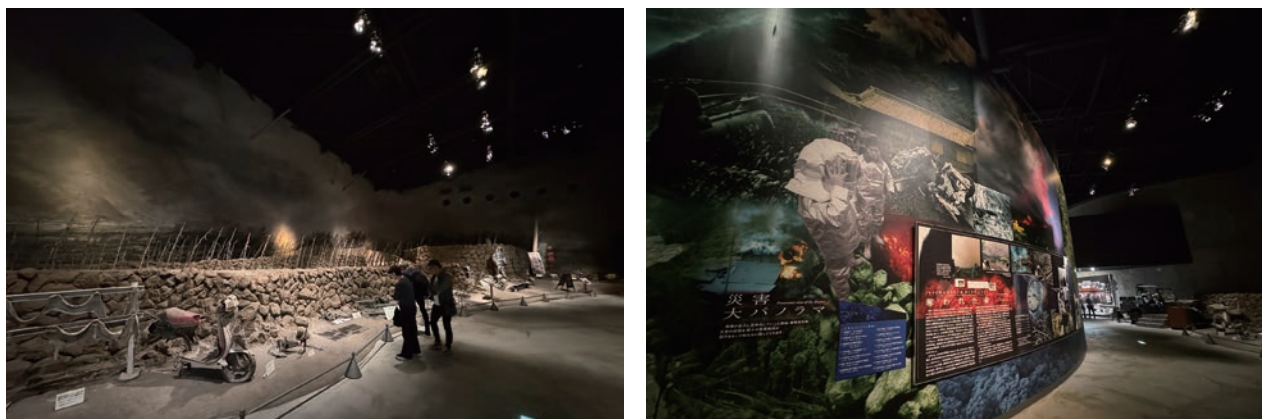
私に関わっている雲仙岳災害記念財団とセンターの共催で「普賢岳の親子登山会」をやっています。毎年夏休み中、親子で我々と一緒に登って、子供たちに火山がどうやってできたかを勉強してもらおうっていうイベントです。リピーターの人も多いみたいで、申し込み開始から5分で満杯になってしまったと

いう話を聞いてますね。

島原半島の学校の子供たちは必ず雲仙岳災害記念館に勉強しに行くことになっています。火砕流で全焼した大野木場小学校とか島原に近いところなんかだと、もし次にそうになったらどう避難したらいいのかっていう災害学習というのが盛んに行われています。こういったことがやっぱり重要だと思っていますね。

災害記念館はそういうことを後世に伝え、勉強してもらうために作ったんですね。北海道の有珠山だったらだいたい30年、三宅島だったら20年ぐらいに噴火を繰り返してるので、噴火の記憶が新しいうちに次の噴火が起こるからいろんな避難行動ができるんですけど、雲仙岳は次の噴火がいつなのかかわからない。前回が200年前でしたしね。

我々が得た知識、いろんな知見をいろんな人が後世に伝えていかなきゃならないと思うので、そのために災害記念館をさらに充実させていこうと思っています。



雲仙岳災害記念館（がまだすドーム）は雲仙の噴火を後世に伝える充実した展示。2025年にリニューアルされた（写真はリニューアル前）。

雲仙岳1792年と1990年の噴火
1792年、噴火に伴い発生した地震とともに眉山（前山）が大崩壊を起こし、有明海に流れ込んだ。発生した津波が対岸を襲い、島原・肥後・天草で約1万5000名の犠牲者が出て「島原大変肥後迷惑」と言われた。その198年後の1990年に始まった噴火は、91年に発生した火砕流により、現場で取材していたマスコミ関係者及びフランスの著名な火山学者クラフト夫妻などが巻き込まれ、死者40名・行方不明者3名を数えた。現在の雲仙岳は「一番下の噴火警戒レベル」活火山であることを留意して安定している。

聞き書き
山崎博文さん

国立公園にひっそりと立つ癒しの温泉宿 大自然のある土地の選択こそがオーナーの仕事



100年以上続く宿の経営難に立ち向かう

私は1962年に下田温泉の旅館伊賀屋の長男に生まれたのですが、時代の記憶でいうと、今は個人旅行が主流ですが、やはり当時は団体旅行の方々が多くて、宴会の風景とか、もてなす酌婦の方々、仲居さん方、そういうのが一番記憶に残っていますね。チェックインのときには静かなお客様方が、宴会が始まると賑やかになって、朝また盛り上がりつつと二日酔い気味でお帰りになる。今と違うのは、当時は釣り船のお客様が多くて、朝早くに船で海へ釣りに行かれて、釣った魚

を朝帰ってきてからお刺身にして、朝から宴会なんです。やっぱり景気が良かったというか、そういったお客様方の振る舞いが見ていて非常に楽しかったですね。

「国民宿舎あまくさ荘」ができたのが1966年。「天草五橋」開通の年です。「海辺に立つ旅館」っていうイメージがすごく良かったんです。海岸線沿いに白い2階建ての長い旅館ができて、なんか下田温泉が変わったという感じがすごくありましたね。

小学4年生のときに、近所の小学生たちと下田の旅館街からその国民宿舎まで走ろうという計画を立てて、毎朝4人で走っていたんです。当時の子供たちって体を鍛えようと

いう、なにかそういうのが仲間同士であったんです。学校に行く前の朝の6時ぐらいにみんな集まって、国民宿舎の下、今の「五足のくつ」の下まで走っていました。

国民宿舎に近づいていくと、浴衣姿のお客様方が下駄で散歩されているんです。潮風に煽られて浴衣がはだけたりして歩かれているんですけど、それが図書室に飾ってあった文人が浜辺を歩く姿を彷彿とさせる絵のような文化的な香りというか、宴会目的で来られたお客様方とは違って、海の景色を楽しみに来られているんだなという感じがすごく良かったですね。

高校は熊本市の高校へ通って、その後、東京の大学へ行って。で、在学中、4年のときでしたか、私の父が同業者の保証債務を負わなければいけないということになって父が過労で倒れたんです。父も母も本心では私に帰ってきてほしかったんでしょうけど、帰って来いとは言いませんでした。ただ、私は将来なんらかの表現活動をやっていきたいと考えていたので、小さな宿でも100年以上続いた宿ですから、それが潰れる瞬間というのは自分の目で確かめたいなという考えで帰ってきたんです。

で、帰ってきて帳簿など見てみると、たしかに「あ、これ倒産するかもしれないな」と。けれどもお客様はいらっしゃるわけです。そのお客様方に尋ねてみたんですね。「お客様、なにをに來られましたか」って。その答えは9割のお客様が「魚を食べに來た」で、



「五足のくつ」の門を潜ると山崎さんの仕掛けた異世界へと導かれる。



レセプション棟の「ヴィッラコレジオ」、
バーやライブラリーがある。

天草の下島。国立公園内の急峻な山の森の中に、離れが点在する温泉宿「石山離宮 五足のくつ」があります。目前に広がるのはかつて貿易船が行き来した東シナ海の大海原。天草の自然に「アジアの中の天草」という価値を見出したオーナーが築き上げてきた、自然を主役とし、その土地の個性を生かすスタイルの宿は、日本の国立公園における宿の一つの理想を示しています。どのようにしてこの宿が生まれるに至ったのか。オーナーは天草の未来をも見据えています。

やまさき・ひろふみ／「石山離宮 五足のくつ」のオーナー。1962年、天草・下島の下田温泉の老舗旅館「伊賀屋」の3人兄弟の長男として生まれる。経営不振に陥った伊賀屋を立て直すとともに、世界のホテルを泊まり歩く。2002年に「九州でもない、日本でもない アジアの中の天草」をテーマに、雲仙天草国立公園内に全室「離れ」からなる温泉宿「石山離宮 五足のくつ」をオープン。癒しの宿ブームの魁（さきがけ）となり、天草の海と山の魅力をもてなしを通して発信しつづけている。



パーのあるくつろぎ空間。天草の森に囲まれている。



廊下のマリア像を見て、天草のキリシタンに思いを馳せる。

「ごちそうなんですか？」って笑いながら言われるから、私も笑いながら「はい、そうです」と言うと、予約になるんですよ。お客さんが急に増えたものだから母がびっくりして。旅館の経営も調子良くなってきて返済のめどもついて、3年ほどで売り上げがだいたい3倍になって、私は本格的に旅館をやろうという気になったんです。

世界のホテルを見て回る。 遠いことがいい時代

それですまず世界の宿泊産業はどうなっているんだろうということが気になって、独り旅でヨーロッパやアフリカやアジアへ行きました。その頃1980年代というと、自然が厳しいとか、あるいは遠いとか、ジャングルの中だとか、覚悟をしないと到達できないようなところが旅先としてだんだんと注目されるようになって、旅仲間からいろいろ情報をもらって、そういった場所にある小さなホテルなんかに行っていました。

そのときに思っただけです。ようやく天草の時代が来たんじゃないかって。東京の大学にいたころ「天草は時間的には東京から一番遠いな」と思ってたんです。北海道と沖縄は距離的に遠くても空港が充実していたり、JRが走っていたりするじゃないですか。小さい頃、旅館をやっている両親を見ていて、「なんでこんな遠いところで商いをやっているんだろう」という疑問はたまに湧いていた

んですね。

だからその「遠いこと」がいい時代になったのであれば、これを本格的にやるべきだと。ただ、それにはやっぱり大自然の中でないといけないということを自分なりに発見したんです。南イタリアのポジターノのイルサンピエトロでは、空港に着いたのが夜で、宿にチェックインしたときにはもう暗くてなにも見えなかった。疲れていたから寝て、朝明るくなつて起きたわけです。ほんとオーバーな表現に聞こえるかもしれないですが、ベッドからベッドサイドを見たときに、真下に海があったんです。「これはすごいな！」と思って。タイのプーケット島では1988年にオープンしたアマンリゾーツの第1号の「アマンプリ」に行って、自然の中でもこんなホテルが作れるんだって思いました。それこそ部屋の隣に木が生えているみたいな。

当時の我々の常識から言うと、ゲストは建築物の中にいらっしやるものです。ところがアマンプリで私が感じたのは、建築物の内と外の曖昧さっていうんですね。建築物の中だけが大事なんじゃないかと思っただけです。それをやるには周りに大自然があれば成立しない、土地の選定こそがホテルのオーナーもしくは旅館の主人しかできない唯一のおもてなしだということに気付いたんです。

それで、旅館を建てる唯一の条件は大自然の中ということで、付近を探し回っていたときに、この土地の出会ったんです。地主さんが開発業者に頼んで工事をされていたんです

が、ものすごくいい土地だなと思って。今の「五足のくつ」の駐車場付近で、正面に見える海も当然いいけれども、それ以上に全体の「大自然さ」が素晴らしい。その後、「誰か現金化できるのであれば譲る」という噂を聞いて、あまりにその土地に惚れ込んでいたので、後先構わず「買います」ということで買わせてもらったんです。

ただ、買った方がいいけれども、おそらく旅館はできないんじゃないかなと思っていました。なぜかというと、この辺りは国立公園の指定地域で、我々、この天草の東シナ海に面しているところに住むほとんど——というかすべての人は、国立公園に指定されると自分の土地であっても家を作れない、アンタツチャブルな地域になるというふうに理解していたんです。実際、私の行動を見て「できないよ」と言われる方もたくさんいて、あそこは絶対触っちゃいけない土地だからというような、まあ噂ですよ、それを私も信じて「やはりできないだろうな」と。

それで、当時の本渡市にあった自然保護官事務所の方に会いに行っただけです。「こういうところに土地を買ったんだけど、旅館はできるでしょうか」と。そうしたらその方が「そもそも自然公園法というのは景観豊かなところを指定していて、観光客はその景色を楽しむに行く。当然レストランも必要になるし、旅館も必要になる。だから、ちゃんと作れるように法律を定めている。もし本気で作るのであれば、設計図を持って私のところ

異文化交流の天草のエキゾチシズムが漂う館内。歴史を知るライブラリーも充実。



に来てください」と言われたんです。

それから何度も設計士とデザイナーを連れてその方に計画を見せに行きました。それまで自分一人で考えていたときは、RC構造だったり、何階建てのビルだったりを考えていたんですけれども、だんだんとそうじゃないんじゃないかというふうになって。なにに気付いたかというと、それまでは日本旅館を作ろうと思っていたんです。つまり、当時多くの旅館の経営者は、日本文化・伝統の伝承というようなことを旅館の一番の目的として挙げていたので、私もそれに連なっていかなきゃいけないというふうに考えていたんです。けれども、わざわざ遠いところへなぜお客様が行くかというと、その土地ならではのもの、雰囲気、食べ物を味わいに行かっているわけだから、ここにしかないものを作らないと意味がないんじゃないか、と思うようになってきたんです。

そのときふと、「九州でもない、日本でもない アジアの中の天草」という言葉が自分の中で湧いてきて、「ああ、そうだ、天草の歴史・風土、天草人の今まで生きてきたことを旅館という形にするのが自分の仕事なんだ」ということに気付いたんですね。天草の山の中にある集落や漁村のイメージが湧いて、それが「離れ」という形式になって、ただ数寄屋文化の中の離れではなくて、天草の人にはできない天草の土地の離れでなければならぬはずだと、だんだんと今の形になってきたんです。



山と海の景観が一番の財産。 温泉は湯治文化を継承

天草の大自然の魅力の一番はやっぱりなんの遮りもない海の姿。地球が丸いという感覚さえつかめる壮大さを感じさせる海というのは、あるようでないなと思いますね。必ずなにか視界を遮るものがある海が日本ではほとんどだと思うんですよ。

東京からいらっしゃったお客様に東京の海とこの海との決定的な違いがあると言われたことがあって、私もそのときまで気付いていなかったんですけども、「この海は船がないね」と。けれどもアジアの中の天草であった江戸時代、まさにこの海は交通の要衝だったわけですよ。外国船も入ってくるし、天草の人の足といえば船だったわけですね。その昔活発に動いていた船が今はないけれ

ホテル建設なんか進まないからですね。

けれど今、実際にこの土地に暮らしていると、コミュニケーション不足によって大事なものがなくなっていく恐れや可能性を最近すごく感じるんですよ。

たとえば、全国のいろんな温泉地で温泉旅館をやっている主人の頭の中って、だいたい半分は温泉の心配で、あと半分がお金の心配なんです。でも、下田の場合は温泉の心配と私の父たちの時代に集中管理組合をつくったからです。それまでは、たとえば1軒の旅館が100メートル掘っていて、温泉がめるくなつたからじゃあまた温泉掘るってなると隣の旅館の温泉が出なくなったりする。そっちを掘ったらこっちが出なくなった、成分が変わったとか起きていたんですよ。

集中管理するには自家源泉を封印しないと作れないんですね。保健所が封印したことを確認して組合員になれる。それだけの厳しい規則のある組合だから、集中管理組合って熊

ども、この海を舞台とした歴史的事実と重ねて海を見たときに、かつての東シナ海近海の素晴らしさというか、それを演出してくれている独特の世界になってくると思うんですよ。なおかつその海だけではなくて、この急峻な山があつてその海の景色であるというところが天草の大自然の魅力ですね。

伊賀屋で送迎バスの運転手をやっていたときに、バスが下島に入って福連木あたりの一番の山間部に来ると、みなさん一様に「山がきれい」って言われるんですよ。「山がきれい」ってなんだろう?と思って。

考えてみると、阿蘇とか人吉は昔から植林が盛んですが、天草のほうは貧しいがゆえに植林していないから雑木山になった。その雑木山がきれいだと言われていたんですね。

「五足のくつ」に行くには、急な坂を登っ



料理は天草の地魚をメインとしている。

本県でも2つしかない。下田温泉でそれができたのは、やはり組合員たちの繋がりが、仲の良さというか、コミュニケーションがあったからだと思うんですね。自然が守られてきたのも自然公園法だけではなく、それを議論する場があったからなわけです。

私が天草に帰ってきたときの人口が6000人ほどでしたが、今はせいぜい2200、2300人。地元のコミュニケーションが成立しなくなっていったら、一人の誤った考え方にみんなが誘導されて、一人の過ちが全体の過ちになりかねない。たとえば、海岸部に広い土地と施設があつて地元の人たちがその景観を大事にしてきたとするじゃないですか。でも新しくその当主になった人が、そんなの関係ないからと売ってしまったらもうなくなっていく。その息子さんや娘さんがコミュニケーションできる機関に入っていないかったら、そういうことすらも伝わらない。そうしたこと宝物が失われていく恐れを感じますね。

『五足の靴』とは

明治40年の夏、詩歌誌『明星』に与謝野寛(よそのひろし)(鉄幹(てつかん)、北原白秋(きたはらはくしゅう)、吉井勇(よしいさむ)、平野萬里(ひらのばんり)、木下李太郎(きのしたもちたろう)ら5人の詩人が九州を探訪した『五足の靴が五個の人間を運んで東京を出た。』に始まる紀行文。『東京二六新聞』に交代で執筆され、日本耽美派文学の出发点とされる。天草にも立ち寄っている。宿名「石山離宮 五足のくつ」はここから。ちなみに「石山」は天草陶石の採石場があつたことに由来する。



「五足のくつ」オーナーの山崎博文さん。

国立公園になって保たれた自然が 消えていく可能性もある

国立公園になって良かったのは、これだけ大自然を保っているということです。地元の人もそれをすごく感じているし、やはりこの景観の素晴らしさは地元の人にとっては誇りです。夕方になると、おじいちゃん、おばあちゃんまで地元の人たちは海岸線に来て海を見えていますね。

海辺の温泉地と言われているようなところに、お客様がたくさん来て宴会していたあの時代にたくさん建った、すごくでっかいホテルが今も残っているじゃないですか。母から「あの旅館があつた土地買ったよ、今度はあそこを買いたいだよ」みたいな話は小さいころよく聞かされていましたけれど、天草でそうしたホテルができなかったのは、やはり自然公園法なんです。規制にちゃんと収まるものでなければ、最初から経済活動としての



荒々しい海崖風景で知られる天草西海岸の名所、鬼海ヶ浦。

聞き書き
船原英照さん

シーカヤックで上天草の無人島を巡る旅は 日々の疲れを解放する至福の「天草時間」



広大な天草には異なる顔をもつさまざまなフィールドがあります。その一つが有明海の穏やかな海。小島が点在する天草松島は、シーカヤックで巡ってこそわかる魅力があります。波のない海にぼっかり浮かぶ貝殻でできた島、カヌーから見上げるそそり立つ岩。ダイナミックで優しい至福の「天草時間」ともいえる、そんな旅を船原さんは演出し、ガイドしています。移住という形で辿り着いた上天草の海を船原さんは温かな眼差しで見つめます。

ふなはら・えいしょう／シーカヤックのツアー会社「unplugged」オーナー。1967年熊本市生まれ。カヌーでの川下りを趣味としていたが、激流で腕を痛めたのを機にシーカヤックに転向。2003年に会社を立ち上げ、牛深（うしぶか）でシーカヤックとシュノーケリングを併せたツアーを始める。2012年、上天草市に移住し、前島を拠点に天草松島の島々を巡るツアーを開始。天草の魅力を詰め込んだツアーは人気で、遊びを通じた自然からの学びを人々にもたらしている。

自転車旅で天草の海の透明度に 魅せられる

天草との出会いは中学2年のときです。今から40年ぐらい前ですね。

その頃、大学生の間で自転車旅をするのが流行ってたんですね。自転車で北海道を旅するのを雑誌で見たりして、大学生にできるんだったら中学2年でもできるんじゃないかと思って友だち3人で自転車旅を計画したんです。

で、どこ行こうってときに「天草いいんじゃないの?」というようなことになったんです。御船町の友だちの家から出発して1週間ずつとキャンプしながら回りましたね。

天草って海水浴とか小さい頃からよく大人に連れていってもらってたんですが、車だと

ビュッと行ってしまう。でも、自転車って時速10キロとか20キロぐらいだから、今まで見慣れていた風景が全然違うものに見えて。通りの家の裏の庭が超素敵だなとか、風景すべてに感動が詰まって、いちいち止まっては「あれすげえ、これすげえ」って言いながら回っていました。

天草の西海岸に東シナ海が広がるすごいきれいな場所があるというので、そこに行ったら、もう海がとにかく澄んでいて。特に日本初の海中公園になった牛深は見えたことないような透明度の高さで、ちょっと泳いでみたら熱帯魚とかもいて「こんなところが天草にあるのか」って。天草のイメージが覆ったというか。キャンプも楽しくて、天草の魅力がもうめっちゃめちゃそこで自分の中に入っちゃってね。「大人になったらこういうとこに住めた

ら幸せだよな」って思っていました。

でも、大人になるとそういうのって少しづつ忘れちゃうじゃないですか。学校出て、就職をして最初熊本市内の印刷会社で営業マンとして入って。結構優秀だったんです。27歳ぐらいまでいたのかな。

あるとき、営業で毎日行っていた大きな会社の企画部の人が「俺カヌーが趣味なんだよ。お前も遊びにいく?」って誘ってくれたんです。カヌーに全然興味もなかったんですけど、「行ったらもっと仕事ももらいやすくなるかな」という厭らしい気持ちで行ったんですよ。

最初は緑川だったと思うんですけど、次のお盆休みかなにかには「四万十川でキャンプしながら川を旅する」と言われて、「そういや、俺もそんなことを中学生の頃やったな」と思いついて、ついていったんですよ。

そうしたら四万十川の自然の中でカヌーで遊ぶ素晴らしさ、心を解き放ってくれる瞬間に出会ってしまった。上流から下流の海沿いのほうまで2泊3日ぐらいで下って、すぐに自分のカヌーを買いにきました。それから誘ってくれた人はそっちのけで、競技のカヌーとかにもハマったりし、週末になればカヌー。

金曜日の営業に出かけるじゃないですか。営業車の上にもカヌーが乗ってるんですよ（笑）。それで営業に回って仕事が終わるとそのまま球磨川行って、月曜日の朝まで川にいて、早朝4時、5時に起きて家に帰ってシャワー浴びて、スーツに着替えて出社してまし

前島橋の下を通過して無人島を巡る。



たね。それを毎週毎週繰り返していたんですね。もうそれを楽しむために仕事頑張るみたいになってたんですけど、35歳のときに「いや、これを楽しむために仕事頑張るんじゃないくて、これで生きていったほうが幸せが倍増するな」と思って、生き方変えるなら今しかない、会社をぱっと辞めたんです。

それからフィールド調査したり、ガイド講習を受けたりとかを1年ぐらいやって、2003年の8月に「unplugged」を創立しました。陸地からではアクセスできない秘密のポイントにシーカヤックで行ってシュノーケリングするというツアーを牛深で始めたんです。

たとえば沖縄であれば、遠浅のどこまでも



夕暮れの静かな海を漕ぐ至福の時。



カヤックの基地は観光拠点施設の一角にある。



国立公園内でシーカヤックの無人島ツアーができるという贅沢。
写真提供／unplugged

するわけですよ。やっぱり遠い、ならば移り住もうと思ったんですね。

そう思って、天草中でもう1回フィールドチェックをやったときに、上天草市の市長から電話があつて、「ここにオシャレな観光施設を作るから、施設の目玉としてここでカヤックやつてくれないか」みたいな話があつたんです。まだここがマリーナで、隣が空き地でなにもなかったときです。

最初はお断りしましたけどね。有明海は透明度がないからシュノーケリングもできない。けれども、「もう一度フィールド調査をやつてもらえないか。市ができる限りのバックアップはさせてもらうから」という話をいただいて、市長とバーベキューを一緒にしたりして意気投合し、この人のためになにかできることがあればとフィールド調査から入ったんです。

いろいろな無人島に上陸したりして何日も遊んでいるうちに、今、シェルアイランドって僕らが呼んでいる縦横60メートルくらいの真つ白な小島を見つけたんです。島の周りに同じところをぐるぐるぐる回る潮があるからだと思うんですけど、いろんな貝殻が流れているんですよ。そんなオシャレな貝とかじゃないんです。

でも、そこにいると心地よくて、「ああ、ずっとここにいたいな」って思えるような、なんとも言えない、言葉ではなにか表現しにくい幸福感に満たされるんです。

「ここを売りにしてシーカヤック無人島ツ

アーで、1からチャレンジしてみよう」と思つて、上天草に移り住むことにしたんです。シェルアイランドがなかったらやつてなかったかもしれないですね。

それからじつくり、ここをもうほんと回りまくりましたね。季節ごとの潮の時間を調べたり、危険な箇所を地図上にチェックしたり、安全確保のためにみっちりくまなく調べに調べて、1年以上かけたんじゃないですかね。

松島をフィールドにして本格的にやりだして11年目です。2年間は牛深とことどこらでもやれるような体制を作りながらやつてました。

天草の海に大の字に浮かんで過ごす時間

松島って、島と島の狭くなっているところに隆起した絶壁が両側にそびえて、カヤックでそこを抜けていく瞬間はまさに『リアル』デイズニーシード」ってみなさんおっしゃるんですよ。

一般的にシーカヤックのフィールドって1時間漕いでも風景が一切変わらないような海ばかりなんです。目の前が水平線という海を1時間漕いでも水平線しかない。でもここは5分、10分漕ぐだけで風景が変わるんですよ。

島々を抜けていくと島の向こうにまた違う島があつたり、有明海のだ真ん中に浮かぶ湯島や島原半島の全景がバーンと見えたり、と

にかく変化が味わる海域なんです。かつ、

島々が防波堤の役目を果たして波が立たないので、安全性がめちゃめちゃ高い。これは大きいですね。あまりに波がないので、海を漕いでいる感覚があまりないっていうのはあるかも。

コロナのときにイギリスの大学がなが一番ストレス発散になるかっていうのを調べたら、ライフジャケットを着て水の上に大の字で浮くと一番リラックスできるってことがわかったそうです。自律神経も整うらしいんです。

無人島でお客さんにそういう話をして、ちよつとやつてみてくださいっていうと、もうみんなですつと浮いている(笑)。ストレス抱えてる人ほど上がつてこないですね、「帰るよー」って言うまで。

今、SDGsもやっぱり広げていかないといけないと思つていて、そうだったことの気付きを与えられる仕事だと思つています。それも堅苦しくではなくて、「ゴミ拾いってめっちゃ楽しい」みたいな。

ツアーでは毎回、無理しない範囲で必ずゴミを持つて帰ってきます。海に漂っているビニール袋だったり、ペットボトルだったりをみんなで拾う。

ゴミは都会のゴミですね。海にわざわざ捨てにくる人なんかいないわけですから。有明海は熊本県、福岡県、佐賀県、長崎県のゴミがほとんどで、雨が降ると都会から側溝を通じて川に入ってゴミが全部海に流れてくるっていうサイクルなので、都会に人が多ければ

多いほどゴミの数は多い。

でも、今年はゴミがめちゃめちゃ少なかったんです。雨がとにかく少なかったっていうのが原因です。台風も少なかったから水温も上がり続けるし、海の透明度もすごく悪くなりましたね。

この循環って結局しつぺ返しが来る。自然はバランスとるんで大雨に繋がっちゃう。ゴミ予備軍がくすぶっている状態なので、今度の大雨が降ったらとんでもない量のゴミが来ることも目に見えていて、ちよつと怖いですね。

気候変動と言われてもピンとこない人のほうが圧倒的に多いです。自然の中で遊ぶことによって得られるもののもすごく多いと思うので、たくさんの人に自然の中で遊んで感じてほしいですね。

天草松島と天草五橋

上天草市の大矢野島と天草上島(かみしま)の間にある大小20ほどの島々は天草松島と呼ばれ、宮城県の高松島、長崎県の九十九島(くじゅうくしま)と並び日本三世代松島の一つ。雲仙天草国立公園内に位置する、島々により水路が狭まるため、干満差日本一の有明海の中でも特に上下差が大きく、大潮時にはその差は6メートルにも及ぶ。天草五橋は、宇土(うつ)半島の三角から大矢野島、永浦島、大池島、池島、unpluggedのある前島、天草上島を結ぶ5つの橋で1966年に開通。当時の日本の橋梁技術を結集し、完成までに4年2ヶ月を費やした。天草の島々を巡る五橋の開通は大きな話題となり観光客が激増。天草の交通、産業、生活は一変した。五橋はトラス橋、PCラーメン橋、バイブアーチ橋などそれぞれ構造が異なり、自然と人工物が一体となった風景となっている。シーカヤックからはそうした橋梁美や構造の迫力を間近に見ることもできる。橋から眺める夕日は『日本の夕陽百選』にも選ばれている。



ツアーで上陸するシェルアイランドは天草の楽園。写真提供／unplugged

聞き書き
金井憲昭さん

山男、天草の自然に目覚める きれいな海と常緑の島を次世代へ



山に魅せられて九州の山々を踏破。ピークハントを重ねるなかで、あるとき毎年同じ場所に同じ花が咲いていることに気づき、足下の小さな自然、そしてあまり興味のなかった地元、天草の山や海にも目が向きはじめます。光る海と緑の島々を眺めながら稜線を歩いていく旅は、天草ならではの贅沢なとき。雲仙天草国立公園のパークボランティアとして積極的に関わり、自然公園指導員としても 30 年——人々に自然の魅力を説いてきました。

かない・のりあき／天草自然公園ボランティア協会会長。1947 年、天草郡五和町（いつわまち）の農家に生まれ、天草で育つ。高校生のときに登山に開眼。野外活動研究会に入り、九州の主だった山々を踏破。ピークハントから次第に植物などに興味が広がり、自然保護指導員の資格を取得。1989 年設立の「天草自然公園ボランティア協会」の 2 代目会長として、現在は公園内の清掃や観察会などを行っている。環境省の自然公園指導員としても 30 年間活動し、2019 年紫綬褒章（しじゅうほうしょう）受章。

毎年同じところに咲く花と 出会って

1947 年の生まれで、純粋な天草生まれ天草育ちです。

うちは百姓です。昔はほら金がなくて、良い米はみんな出荷してしまっ、自分らが食べるときは、米に麦を半分入れてですね。腹減ったときには唐芋。今は唐芋みんなおいしいうって食べとつとですけど、私はやっぱり昔存分に食べとるけですね、もう食べたくなりません。本当ですよ（笑）。

外では、ちゃんばらごっことか、かくれんぼとか、それから野球とかですね。軟式テニスの球を竹のバットで振って、友だちたちと遊びよったですね。

高校 3 年のときにですね、たまたま友だちに初日を見に行かんかと言われて、「そんならば行こか」って言って、この天草から有明

大浦までどんくらいあるかな。20 キロメートルぐらい、そこをずっと歩いていって、それから友だちの家で晩のご飯食べて、朝からもう寝ずに、山にご来光見に行ったのが山の最初ですね。老獄（おいづ）っていう山です。

歩いて寝ずに行つてご来光の初日が出たときは、本当みんなが万歳という、そういう気持ちですね。やったーっていう感じですね。それから歩くのが病みつきっていうすか、登って達成感ちゅうですか、それがちよこつとそのとき湧いたかなと思うんですね。

それ以外も、あとは昔は野外活動が好きな人が集まっ作つた野外活動研究会がありまして、高校卒業後すぐ私も入って活動してですね。また同級生が大学のワンゲル部に入つとつて、その人のまた影響もあるしですね。

この野外活動研究会では山からキャンプから、レクリエーション関係はほぼ網羅していろいろしました。1965 年以降ですね。

そん頃の山はですね、岩登りの人たちと一緒に رفتたのが、まず阿蘇の高岳（たかだけ）鷲ヶ峰（わしがみね）であつたですけど、そこはもう岩場のところす。あと根子岳（ねこだけ）、それから久住（くじゅう）。阿蘇がメインですね。

岩登りが中心じゃなかばってんですね。もう休みのときには岩登りに一緒にいいて、あとはもう普通の山。九州の一般の山、主な山はもう行きよりました。泊りがけです。昔の小学校の運動会とかにある、あの生地の厚いテント背負つてですね。水汲んで飯盒（はんごう）持つていって、今のガスバーナーもなくて固形燃料を持つてですね。それとときには火を焚いてですね。阿蘇の根子岳はもうしょっちゅう一人でもですね、なにか仕事で怒られたとか、それからなにかあつたときには山に行つて。

シーズンはだいたい 5 月から夏ですね。冬は鳥取の大山（だいせん）で、夜行列車でみんな通路に寝ながら行つてですね。スキー場もそんなときは鳥取の大山のスキー場。私はスキーしけらんけんか、ついていって、ただ真っ直ぐ滑るだけですね。「どいて、どいて、どいて！」って（笑）。もう滑つて止まるときは横に倒れて止まらんばね。

最初の頃は、山頂に登るだけの登山で、山頂に行つて「いいな」と思うだけですね。花はきれいかったのは思つたんですけど、思うだけで。

それが毎年同じ山に行くと同じ花が同じところに毎年咲くとですよ。この花はなにか



農家に生まれ、今も同じ土地で農業を営む。
自宅周辺には田園が広がる。



会の設立 25 周年の記念誌。

なあと。花の名前を少しは知らんばつたらんばいいねと思つて、それから少しこう調べだしてですね。今はもう景色を見ながら、植物を見ながら登るのが楽しみなですね。天草の山はそんな頃はあんまり興味がなくてですね。自然保護協会の講習会が熊本県であつて、野外活動研究会の仲間と 2 泊 3 日ぐらいで講習会に行つて。そこで自然観察指導員の資格を取つて、それから天草の人たちと一緒に天草の山に登るようになりました。自然観察指導員の資格取つても、たとえば個々に植物の名前を知らなくてもいいと、それに惹かれたんですよ。私たちは専門家ではないけん、植物の名前をほとんど知らんけんですね。「この花きれいでしょう？」それだけでもいいと。そういうふうな最初の指導



観海アルプスのコースにある龍ヶ岳山頂から望む。写真提供／上天草市観光おもてなし課

があつて、これはいいなと思つてですね。特別知らなくてもいいと言われたんですけど、実際始めるとやつぱさういうわけにはいかんちですね、どうしても。

パークボランティアの発足と活動

1989年に「天草パークボランティア協会」を立ち上げた初代会長の岡田壯之祐さんは元小学校の先生ですね。設立当時は「天草青年の家」の専門職やつたですよ。

その前から私たちは阿蘇の「青年の家」に行つていて、やつぱり一生懸命勉強して青年

の家は学習の場やった。その当時はですね、阿蘇にしかありませんでしたので、一応私たちが呼びかけて青年の家を天草にも持つてこようとして。県に「阿蘇の山に青年の家があるから、ぜひ海に青年の家をお願いします」つて言つて「天草青年の家」ができたんですね。岡田先生や環境省の管理官から「パークボランティアを作らんかい？」つて言われてですね。その仲間を募つたところ、我々の自然観察指導員と野外活動研究会の仲間たちが最初やろうじゃないかって言つてつたですね。パークボランティアで行つたのは、まずは国道沿いの清掃活動ですね。最初はほぼそれがメインだったかな。なにかあつたときには清掃活動。

あとは海の生物の観察会とか。植物のほうは環境省主催ではあんまりなくて、パークボランティアの中にいろいろ専門家の人がおらすけですね。その人たちがメインで植物の調査とか観察会、その頃もう保護観察会やつたですね。

私はというと、だいたい山屋（※）やけんですね。前会長の岡田先生ともうずっと昔からの付き合いですから、ただ私はくつついていくだけ（笑）。

でも、登山とか山とかに関してはですね、もうなにも言わせんやつたとですね。

天草の山では、次郎丸嶽、太郎丸嶽、それから白嶽、念珠岳、老嶽、龍ヶ岳、上天草のほうの山ですね。上天草は国立公園内に良い山はなかったもんやけですね。

山には一応植物の調査つちゅうんですか。どういふのがあるのかというような感じで、専門家の方に植物の名前を教えてもらう。専門家といつても学者まではならん人ですね、詳しい人。「これは珍しいな」というのには、毎年おんなじところで何年かずつと通して、減るか減らないか、それがどういう状態に変わっていくかという調査を続けていこうという形で観察を始めて今もずっとやつております。岡田前会長が一番詳しくつたですね。なんでも一番詳しくつた。私は二番煎じですの、10年ほど前に受け継いでこの協会を守つておるだけです。

※山が好きな人、本格的な登山をする人のこと

国立公園と向き合つてきた人生

国立公園の指導員を70歳まで30年しとつたんです。自然公園指導員つて資格は特別ではなかですけど、自然に興味のある人が環境省から委嘱を受けて、年に1回報告する義務があつて。やることは結局ほぼ個人なんですけど、山で歩きよつたときに、盗掘、それから木を折つたりとか、道で迷つたりとか、そういう人たちの指導とか。怒つたりしたらだめですね、「折つてはだめですよ」とやさしく注意する。あとはそれを環境省に報告する。あそこでは盗掘がありましたとかですね、道が壊れとりましたとか。そういうのをやつとりました。

国立公園天草の魅力は自然とやつばもう海

岸ですね。侵食された海岸、それから内海は波静かな海岸、これがやつぱなんといつても一番魅力ですね。景色が良い。海岸がきれいいし、特に西海岸に行つたら夕日がきれいですね。これはもう最高ですよ。それと、天草の北とか東のほうに行つたら、静かな海岸もあつてですね。松島とか向こうのほうはこつちの西海岸と全然違うような形が見えてですね。今は結構天草外周道路がずつとできとるけんですね。そこはもう天草の一番良かところ。

九州の本土といつたら結構山は落葉広葉樹ですね。冬は散つてしまふとですけど、天草はほとんど落葉広葉樹はなく、常緑広葉樹。シイ、カシがメインで、あとタブノキとかクスノキですね。それが一年中茂つて。今は植林されて、スギ、ヒノキもあつたですけど。

山が冬になったら景色が良くなるというのはもう天草の山ではないですね。九州山地の山へ行つたら、木の葉が落ちてしまつて見通しが良かですけど、こつちは一年中見通しは悪いです。それが天草の山の特徴ですね。

「観海アルプス」といふのが上天草にあつとですけど、環境省の九州自然歩道の一部で、ほぼ国立公園の中ですね。そこを歩くとアルプスみたいに景色がきれいだなとで、「観海アルプス」と名付けたという、どつかの山の好きな人がなにかおられたつていつてですね。そこは、向こうのほうは八代海、不知火海なんですけど、山が凸凹していて



右・アマクサミツバツツジ観察会 左・海岸のゴミ拾い 写真提供／天草自然公園ボランティア協会

ずっと稜線を歩いていつたら海がずつと見え、それはもうきれいかです。もうそこは最高の山です。わざわざ「観海アルプス」てついたところは、日本ではほかになかつて思ふばつてんですね。

その昔、50年くらい前の道があつた頃は木が小さかつたけど、今もう大きくなつて、見晴らしが悪いところもあつとですよ。

山の上もみんな一緒ですね。今はほら、スギ、ヒノキが大きくなつて、見晴らしがもう全然だめですね。見晴らしがいいような高いような塔を建てて、見晴台を付けるような形ですね。

観察会とかで一般の方に「ここは国立公園ですよ」と言えば、「ああ知らんかつた」つて、国立公園のネームバリューはもう大したもんです。地域振興会でも、興味のある人はそこを盛り上げ地域に知らせていこうという方がいっぱいおられてですね。私たちがそういう興味のある人たちと手を取り合つていければと思います。

天草自然公園ボランティア協会

環境省の後押しを受け、天草の自然を愛する有志により1989年に発足したボランティア団体（発足当時の名称は「天草パークボランティア協会」）。初代会長は岡田壮之祐氏。現在会員は36名。現在の主な活動は、①自然観察会 春のアマクサミツバツツジ観察会、秋の草花の観察会、ハクセンシオマネキの個体数調査、②希少植物の調査・保全 ③ヨウジョウバカマ、アマクサツトリモチなど、④登山によるゴミ拾い（年2回）、④海の清掃（年1回、国立公園内）。金井憲昭さんは2代目会長。

奥様の由喜さんと自宅の近くにて。

編集後記

火山の雲仙と、海の天草。大地の鼓動を感じる荒々しさと、多島海の穏やかさというように、対極の雰囲気を感じる事ができるのが、雲仙天草国立公園です。この度、『火山と暮らす、多島海に生きる ― 国立公園ものがたり―』を編集するにあたって、雲仙天草国立公園に暮らす6人の方々にこれまでの人生について伺いました。どなたもこの地域の自然の特徴や歴史を深く理解し、自発的に自然を守りながら、ご自身の取り組みをされていきました。特に、自然景観の魅力を話されているときは、目を輝かせながら嬉しそうに話されていたのが、とても印象に残っています。

雲仙が身近で上質な自然がある場所であること。田代原が唯一残る放牧草原で、エネルギーを感じる場所であること。有明海が干満差によって、海の変化を楽しめること。東シナ海には地球の丸さを感じられるほど遮りのない水平線が広がっていることなど。本誌をご覧になったみなさんも、自分が最も好きな景色や場所、状況などがあるのではないのでしょうか。取材を通じて、この地域の人々が常にこの唯一無二の自然とともに暮らしているということを知り、とても羨ましく感じました。

雲仙天草国立公園は指定から90年、国立公園としては最年長の公園です。この度取材をしたみなさんは、ご自身の取り組みの中で草原の保全活動や海に漂っているゴミの回収、動植物の調査など、自発的に自然を守る取り組みを進めていました。長い歴史のある雲仙、天草の地域の魅力に気付き、自分たちの手で守り受け継ごうとしている姿が、そこにありました。このように人の手によって自然が守られているからこそ、今日の雲仙天草国立公園の美しさがあるのだと感じています。そして、この地域に暮らす人々によって自然や歴史を生かしたさまざまな観光コンテンツが生み出され、今後も多くの観光客の手から雲仙、天草の魅力が発信されていくと思います。地域のみなさんとともに歩む雲仙天草国立公園が、この先の100年も守られ受け継がれつつ、どのように発展して行くのか楽しみで仕方ありません。

最後になりましたが、本誌をここまで読んでいただいたみなさん、そして取材にご協力いただいた雲仙天草国立公園とともに暮らすみなさんに、心より感謝申し上げます。

株式会社オールアバウト

雲仙天草国立公園
火山と暮らす、
多島海に生きる
国立公園ものがたり

発行月 …………… 2025年3月第1刷発行
発行元 …………… 環境省自然環境局国立公園課国立公園利用推進室
東京都千代田区霞が関1-2-2 中央合同庁舎5号館
TEL 03-5521-8271
http://www.env.go.jp/nature/nationalparks
http://www.oalabo.co.jp
企画・編集元 …………… 株式会社オールアバウト
東京都渋谷区恵比寿南1-15-1
APLACE恵比寿南3F
http://oalabo.co.jp
全体管理 …………… 子上知穂・五十嵐亮太
編集主幹 …………… 土居里佳
デザイン進行 …………… 吉田拓実
アートディレクション 鈴木美里
デザイン …………… 鈴木美里
青砥美穂子 (bluepine)
加藤舞 (Onefine Day)
西菜花 (株式会社CON)
三宅暁 (株式会社編輯舎)
久我秀樹 (久我写真事務所)
撮影 ……………
コーディネート・執筆 天川佳代子
校正 …………… 雲仙観光局
写真提供 …………… 上天草市観光おもてなし課
奥雲仙の自然を守る会
雲仙岳災害記念館
九州大学大学院理学研究院附属
地震火山観測研究センター
unplugged
天草自然公園ボランティア協会

この印刷物は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断の基準にしたがい、印刷用の紙へのリサイクルに適した材料【Aランク】のみを用いて作製しています。

九州・沖縄

